



季節を知ったら  
暮らしが楽しくなった

〔第三二五号〕

夏至げし 六月二十一日

## 疫病退散を願う

おかげ横丁が再開したと聞いて、さっそく出向きました。コロナウイルス感染症の対策がなされた中、目についたのが五十鈴茶屋の新作菓子「アマビエ」です。

アマビエは、今回の感染症の流行で急に知られるようになった妖怪。長い髪とくちばしをもった人魚のような姿は、疫病退散を願い、イラストや神社の護符ごふになったりしています。

このアマビエなる妖怪が現れたのは、江戸時代後期、九州の肥後国（熊本県）のこと。一八四六年の瓦版によれば、海中に光るものが現れ、これを役人が確かめたところ、「当年より六カ年は豊作となるが、もし流行病が流行ったら人々に私の写しを見せるように」と言い残し、海に没したといえます。瓦版に載るくらいですから、海から現れた救世主は当時も話題となったことでしょう。

海から現れる救世主は、アマビエだけでなく、観音さまもいらっしやいました。先日も松阪の継松寺のご本尊が、伊勢二見の海で漁師が見つけたものと知りました。寺伝によれば、七五〇年の大洪水の際とか。この如意輪観音像は、「岡寺さんの厄除け」観音として広く知られます。

二見の海で漁網にかかった観音さまは、京都にも。人形寺で知られる上京区の宝鏡寺ほうきやうじのご本尊の聖観音像しょうくわんのん（秘仏）です。なんでも手に円鏡を持った珍しいお姿といえます。

夏至のころ、夫婦岩の真ん中から朝日が昇る二見浦は、「清き渚」と呼ばれ、禊が行われてきた浜。そこから姿を現した観音さまはやはり靈驗あらかたと信じられてきたのでしょう。人々が聖なる海に抱く思いがうかがえます。

文 千種清美



# おかげの里便り

五十鈴塾

## ○『お伊勢さんへの修学旅行－戦後編－』

戦前に修学旅行の代表的な目的地であった伊勢神宮、あの大変な時代でも先生や親たちは子供たちにいろいろなものを見せたい、体験させたいと頑張ってきました。

山中先生のお話は「えっ そうなの？」ということの連続、例えば旅の宿泊、食事、交通、参拝の手はずなど、今では旅行会社がしていることを全て土産物屋がやっていたそうで、それって御師と同じですね。

短時間であらゆるものを見るため長時間の移動や無理に生徒たちは慣れてゆき、それが団体行動の習得につながってゆきました。

いまでも日本人の旅行形態にはその影響が色濃く残っているなど、修学旅行の果たした役割は大きいものがあつたようです。

終戦後、修学旅行は10年ほどたってようやく本格的に再開されましたが、その形態はずいぶん変わってきています。

伊勢への修学旅行は下降の一途で、令和元年の参拝者は統計が残る明治28年以降3番目に多い数値であつたにもかかわらず、学校参拝者は4万人をきる数字となっています。

今回は戦後の修学旅行の変遷についてのお話ですが、その移り変わりに戦後の日本人の変化が伺われます。

と き／7月3日(金) 18:30～20:00

講 師／山中 一孝(豆腐庵山中代表取締役)

参加費／一般1,350円 会員850円

集 合／五十鈴塾右王舎

講座についてのお問い合わせ・お申込み／電話0596-20-8251

五十鈴茶屋

## ○節気菓子

あじさい  
紫陽花

羊羹のきんとんで色とりどりに仕立てた、あじさいの七変化。梅雨もまた楽しからずや、この時季の風情です。

こくどうかん  
黒糖羹

黒糖の羊羹と錦玉を重ね、琥珀のような色合いに仕上げました。こくのある甘みで、ひとときの夏時間をお過ごしくださいませ。

さと ほたる  
里の螢

金柑の入った葛寒天で白餡とこし餡を包み、金色の螢火が描き出す情景を表現しました。